

彙報

信仰は、倭健命の靈八尋白智鳥と化せられし傳説あり死後靈魂が鳥によりて彼岸に行く事は天若日子葬式に關する傳説あり、二、死後靈魂は船に乗りて彼岸に達する事の信仰は、船形の棺の存在によりて推察し得べく、三、靈魂が太陽或は天に上る思想は、本居宣長の否定説、橘守部の肯定説もさる事乍ら、土俗學上より考察して、靈魂が鳥に化するといふ信仰は、靈魂昇天の信仰の存在を間接に暗示するものなり。故に南洋・亞米利加・亞弗利加等の自然人民間に行はるゝ鳥船神話の三要素は大體上我國古傳古俗中に於ても發見さるゝを以て、日本書紀に全く合理化されて傳はれる天鳥船の觀念は始め神話的意義を有し、靈魂を太陽——少くとも天に運ぶ鳥形の船を意味せしに非るか。(以上中村)

●國史叢書の第二期刊行と史料通覽の續刊

國史研究會はさきに黒川真道氏を編纂主任として國史叢書を刊行し來りしが、昨年十二月を以て其第一期刊行豫定書三十五冊を完成したりしを以て更に本年一月より第二期豫定二十四冊の刊行に着手し、毎月一冊宛を配本しつゝあり。本期に於ては會員今村勝一氏新に主事となり、文學士矢野太郎氏を共編輯主任とし、第一期刊行書が史料として低級の譚ありしに鑒み、今回は大に其撰擇を慎み、學者に取つては史料となすべく、一般讀者にも趣味ある讀物たらんことを期し、編纂方針は之を史傳及史論考證の二部に分ち、更に史傳中を通・別の二大綱とし、通は略々時代を追うて叙述せるものにして、別は地方誌、戰誌、神祇釋教、政治經濟、風俗文藝に關するものを採れりといふ。今こゝに豫定書目を列擧すれば左の如し。

史傳 通誌 玉露叢 甘露叢 文露叢 寬明日記 續談海

別誌 關侍傳記 三家誌 武野燭談 津輕創業記 江戸軍記

秀吉事記 脇坂記 金山記 勢州軍記 加越登記 信陽

上田軍記 九州雜記 三國獲亂記 川上久國雜話 神宮

年代記抄 通海參詣記 常基古今雜事記 熱田大宮司由緒書 神木入洛記 磯城の探湯 浮世の有様 夢の跡 番外 承久記(内閣本、前田本、慈光寺本) 保間記(異本) 覺一本

平家物語 西源院本太平記 史論考證 睿籤警言 かみのみてしろ みかほじみや 筑紫官家

考押字考 日本紀の御局の考 武家邸宅考

又國史研究會と異名同體たる「日本史籍保存會」に於てはさきに諸家の記録を主として史料通覽の刊行を企て着々刊行中なり。記録の刊行は難事申の難事にして、往年此種の企として哲學書院の史料大觀ありしも、僅かに數部を出だせるのみにて中止せられしが今や史料通覽の刊行あり、博く諸本を蒐集して嚴密なる校正を加へ學者多年の渴望を醫せん。其學界に貢獻すること實に大なりと謂ふべし。聞くところによれば平信範の日記たる兵施記は京都帝國大學及近衛公爵家所藏の自筆本に據りて出版の豫定にして其第一冊上梓近きあり、而して同會は會員組織にして會員以外には絶對に配本せざるを以て此際同好の士の入會を歓迎しつゝあり。吾人は此機會に於て第一期刊行豫定書目及既刊書目を掲げて同會の事業を表彰し、併せて其將來を祝福せん。

小右記二冊(既刊) 左經記一冊(既刊) 帥記・水左記一冊(既刊) 永昌記 長秋記 中右記七冊(既刊) 兵施記 山槐

記二冊(既刊) 吉記 三長記 平戶記 勘仲記 吉續記 康富記 二水記

●京都叢書の完成

大正三年十一月より逐次刊行を計劃せし京都叢書は豫定の十二冊を後に改めて十五冊とし昨大正五年十月を以て其最終卷を刊行したりしが、最近又此叢書の索引一冊を印行し、其取載の項目一萬六千を五十韻別と卷冊の別により排列したるを以て本叢書利用者益するところ甚だ大なるべし。茲に本叢書の完成を告ぐるに當り其収録したる書目を列擧すれば左の如し。

京童 跡田 菟蓼泥赴 出來齊京土産 扇川之水 京内ま
いり 都花月名所 洛陽名所集 京師巡覽集 近畿歴覽記
扶桑京華志 名所都島 京町鑑 山城名勝志 京雀 山
城名跡巡行志 京城勝覽 都名所車 京羽二重 京羽二重
織留 山城名所寺社物語 洛陽十二社靈驗記 都名所圖會
拾遺部名所圖繪 雍州府誌 日次記事 京都切目誌 索引

●京都文科大學考古學研究報告の出版

京都帝國大學文科大學考古學研究室の濱田耕作及梅原末治の二氏は昨年末より本年一月にかけて、九州地方出張中、熊本縣に於いては主として彫刻彩色を以て裝飾せられたる古墳を調査し新發見も少からざりしが、此等は我が美術史の資料として尤も興味ある

のみならず上代支那文化の影響等を見るにも頗る重要な意義を有するものなるに、從來既に知られたる六嘉村古墳さへ其の模様全部は未だ世に紹介せられしことなければ、京都文科大學にては今回兩氏の調査を取認め、文科大學考古學研究報告の第一冊として、近く四月中旬を以て出版の計畫あり、從來我國に於いて考古學人類學に關する研究報告としては建築學のもの帝國大學より紀要として出版せられたり雖も、古墳の研究に於いて斯の如き純學術的出版の公にせられしことなきを以て同書は此の欠陥を補ふことを得て我が考古學研究者を裨益すること多かるべし今回出版せらるべきは「肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴」と題して體載は在來の大學紀要と同じく、本文約百頁圖版四十枚色摺二三を添へ、諸方に配布せらるゝ外少數の殘部は丸善書店の手を経て實費(約一圓五十錢)を以て購入することを得べしといふ。

●宇治宿禰の墓誌發見

本年一月十日より十一日に亘り山城國乙訓郡大枝村大字沓掛の中村嘉十吉氏其の所有に係る同村大字塚原小字宮田第四十二番地の竹藪を掘りて、地下約五尺に一の墳墓を發見し石函に納めたる銅製骨董と宇治宿禰の銘ある銅版一枚を獲たり。今實査せる所に依りてその概要を報ぜん、墳墓は北西より南東に延びたる丘陵の尾の南腹に設けられたるものにして、朝日照り夕日輝く形勝の

置に當り、その構造地下を穿つて墳をなし、小石を置き、一邊一尺四寸内外の花崗岩の切石製の石函を安んじ、内に火葬の骨を盛れる徑四寸、深二寸六分内外の藥籠蓋、圓筒形の銅蓋を納め函の外側の前面に銅版を置きしが如し。銅版は薄き延板なるを以て周圍腐蝕せるが上に、發掘の際して質を驗する爲上下を缺き、爲に長さを減じて原形を知るべからず。現存せるは幅一寸八分五厘(畧原形の儘)長さ三寸餘に過ぎず。之に三條の細き縦線を刻して其の間四行に銘あり、左の二十五字を存す。

前誓願物部神

八繼孫宇治宿禰

大平子孫安坐

雲二年十二月

此の外第一行の「前」字の上、第三、第四行の下部に字畫の一部を認むべし。全文は之にて明ならざるが第四行の日附と他の行の文字の配列より考ふれば上下の缺字は二三字に過ぎざるならん。此の銘文中、宇治宿禰とあるものが埋葬せられし人の名にて、第一行半よりこれ迄の數字は其の世系を示したるものなり。即ち物部神とあるは物部氏の祖神なる饒渟日命を指し、宇治宿禰かその子孫何世に當るかを示したるもの、不幸にも八の上が缺字にて之に至る代数明ならざるが、年代より考へ十又は二十とありしものと考

へらる。新撰姓氏錄の山城國神別の條に宇治宿禰、饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也とありて、銅版の示す系圖と一致せり。

此の宇治氏は山城の宇治の地に據り名を得たる氏族にして、元來は連姓なりしが、天武天皇の十三年に姓宿禰を賜りしものなり。

年號を誌せる雲の上の字缺けて明ならざるが、下に雲の字ある年號は坂國にては慶雲と神護景雲とのみなり。而して他の行きの銘文の配列より考へ、文字の書體より推せば寧ろ慶雲ならんと思はる、何れにするも奈良朝を降るものにあらず。此の發見により當時多く社會表面に發展せざりし此の氏が乙訓郡大槌の地方に住してかゝる支那風の墓志を作れる事を知るゝなり。銘文中に饗願の句あり、大平子孫安坐と見ゆ普通の墓誌の書き方と異なる所あり、此の銅版は或は墓誌には非ざるかと思はるゝが、當時比較的郡に遠き地方にて作られたるものなれば自ら書誌に通ぜず、かゝる言葉を刻せりと解して可ならん。

此の遺蹟の發掘に依りて吾人は我が金石學上に一貴重なる遺品を得たると共に、一方之を出したる墓の構造が明なるを以て、考古學上本邦墳墓制研究の上に一の標準を與ふることを得るは幸にして、墓の主要部が火葬の骨を銅器に納めたる形式なるは明に佛教の影響より來れるを認め、類似の遺蹟の家長朝に少ながらざるを併せ考ふれば、當時大なる封土を築きて墓を營む風が漸次廢して

正に我が墓制の一大變革期なりしを示すものと云ふべし。

●史學研究會

茶話會 大正六年二月三日午後一時半より文科大學第八教室にて本會茶話會を開き會員一同胸襟を緩くして打ち語らひたり席上理學博士小川琢治君は最近兩回支那視察旅行に就て談話を試みらる博士は大正五年八月下旬より十一月中旬まで及び同十二月中旬より大正六年一月中旬までの前後二回の朝鮮及び北支那旅行に於て採收せる佛像類八點、陶器及び料器類十二點、銅器十五點、發掘品三種、拓本類三十四點、化石八種、支那地誌類七十二部、寫真類九十枚の説明を兼ねたる旅行の經過を述べんと冒頭して、京城にては李王職博物館、總督府博物館の參觀品、仁川測候所に於ける古き氣象用具滿刻、日時計天文の圖等を説明し、平壤にては附近の地形と其古圖とを對照し、次で朝鮮北部及び兩滿洲の地形と地質との關係を論じ、其日本内地と異なる點は我に在りては新しき時代に地盤の昇降頗々起り、地形頗る複雑なるに反し、彼は少くとも第三紀以後は平穩にして、山は低く風水の浸蝕其極度に達し、風化する土砂を殘せり、而して斜面少く全體としての高低の差小にして、且つ滿洲の西部にては黄土の堆積厚く、其間處々に此地方の地盤の基礎をなせる古生代カムプリア層及びアレカムプリア層等が急に聳りて多くの斷崖をなせるを指摘せられたり、かく

て本溪湖撫順等の深炭の狀況、金州に於ける高麗古墳發掘の有様京奉線寧遠附近の地勢、北京市街人文の發達等を談りて後山東方面に入り、濟南、青州、博山等の現狀に及び、魏の古邑博平に於ては黃土層下約十五尺出土の戰國時代瓦器採取に附説し、黃土堆積の新記録を得られしこと及び膠州灣青島の現狀と旅行中の感想とを述べて局を結ばれたり。是日會する者四十餘名、午後六時散會せり。

例會 三月十日午後一時半より文科大學第九教室にて開催左の講演ありたり。

肥後に於ける彫刻ある古墳に就いて 梅原末治君

昨年末より本年初にかけ原博士、濱田助教に從ひ宮崎縣西部原古墳の發掘に出張したるの途次、十數日間に亘り調査せる同國飽託郡千金甲、上益城郡井寺、八代郡大良職、葦北郡千小円、天草郡阿村、宇土郡不知火村、玉名郡玉名村、球磨郡大村及び西村、玉名郡石賀村横穴群及び穴觀音等の諸遺蹟の構造形式を述べ、これに刻せる文様を一々會場陳列せる拓本、摸寫、寫眞に就いて紹介し、一般古墳墓の年代より類推して是等の古墳の何れも奈良朝以前に屬するを云ひ、其の構造は支那の漢六朝の墓制に、また文様を表はせるは同代の磚の形式に模せるなるべきも、而もその現はされたる文様を見るに、文様の分子は四種あり、矢箇の如き所謂蜘蛛巣

文様の如きは特種のものにて、支那とは關係なきが如くなれば彼の影響なりとは決定的に斷すべからず、此の意味よりは是等の文様は獨り墳墓の構造のみならず我が上代の彫刻繪畫を窺ふべき貴重なる資料なりとし、なほ石賀村の穴觀音なる横穴に瓦葺の如き構造を表はせるものあるよりして本邦上古に於て九州の一部には既に早く瓦葺の建築の行はれしに非ざるかを推測せり。

支那に於ける近世火器の傳來に就いて

文學士 矢野仁一君

近世火器の觀念は(一)硝磺礮黃柳炭の三品を混合したる所謂近世火藥を用ゐる事(二)此近世火藥を彈丸の發射力として用ゐる事を要す、發射力として用ゐるが故に有筒式金屬製のものたる事を要するに至るべし、隨て近世火器の傳來の問題は(一)近世火藥の起源或は傳來(二)近世火藥を發射力とする有筒式金屬製火器の起源或は傳來に分つ事を得べし近世火藥の成分の東西同一なるは起源の同一なる事を想はしむ。此點より西洋人中には西洋起源説を主張するものなきに非るも、西洋に於て普通の説は支那起源に傾けり然るに明代の支那人は却つて支那人の發明に非ず西域より傳來せるものとなす。火藥の起原は今日に至る迄群疑の裡に包まれて紛々決する所なし。然るに北宋仁宋時代の書武經總要に礮黃礮木炭末を混合したる火藥の一法あり。群疑を斷じ東西の西洋起源説

を唱ふる論者を沈黙せしむるに足る。然るに支那人の却つて之を西域より傳來したりとなすものは、其眞に近世火薬として威力を發揮するに至りたるは其發射力として用ゐられたるに始まり、之を發射力として用ゐる事は西域より傳來したるが爲めに非るなきか。支那に有筒式火器を用ゐたる明證あるは明初より始まる。思ふに元末西域より傳來したるものならんか。永樂帝交趾征伐の結果、大小の近世式銃砲が悉く交趾より傳來したりとなせる明史兵志趙翼の該餘叢考の説は妄なり。明代の銃砲に彈なし彈あるは交趾傳來の神機鎗砲なりといふ後藤藤齋、君の論は謬なり。同みに元軍の宋の襄陽を陥れたる圓々砲は巨石砲にして有坂博士が之を以て火器とせられたるは誤解なり。文永弘安の元寇に元軍の我軍を苦めたるてつぼうは火砲を以て火薬を入れたる鐵丸を抛ちたるものなり。單に燃焼劑を抛ちたるものとせられたる押上中將の説は素強の辯なり。而して同々砲を用ゐて抛ちたるものとせられたる松井等君の説も小誤なきに非ず云々。

會するもの三十餘人、會場には講演關係の肥後の岡、千金甲、井寺千小田等の古墳にある文様の拓本、摸寫、寫眞數十點並に近世火器研究參考書の陳列ありたり。

● 讀 史 會

例會 一月廿六日午後六時より學生集會場に於て開く。來會者三

浦、喜田兩博士、西田講師、清原、中村兩學士、松野、富森、下川、牧、古田、丹羽、桑原、鈴木の諸君なり。席上左の講演ありて質問批評例の如く十時半散會せり。

美濃國本巢郡の條里

鈴木登君

主として岐阜師範學校の阿部榮之助氏の研究を紹介せんとして條里の制の濫勝に就きては本居内遠翁は靈龜元年に始れり云ひ、關野博士は和銅六年に始れり云はるゝが、思ふに和銅六年に始りて靈龜元年にその名稱を生ぜるものにあらずや。條里には定りたる制あれども亦例外もありて必ずしも一定せず。美濃國全部に條里の行はれしは慶雲三年七月笠朝臣麻呂が美濃國司となり、その後再任し又按察使となりて約十五年間美濃及其の附近の地を治めたるに視て、この間の事なりと思はる。美濃國の條里の名は今日十五郡の中九郡にその遺跡を認むるを得。而して本巢郡は國の中央に在りて郡内を北より南に流るゝ糸貫川あり。今の本巢郡は稍々廣げれども昔は尙狹かりしが如く、又水流にも變化ありたるが如し。その條里の遺跡として残れるは十四條、十七條、十八條、十九條の各村名等にして、それらより種々考究すれば、この郡は二十三條六里に分たれ、その條里の立て方は捨芥抄にあると同一なることを知るなり云々と説き、最後にいふべきは本巢郡に關する

古文書は從來未だ發見せられざりしが、近年我國史研究室所藏の勸修寺文書中より二通を發見し、これらによりて其一斑を知るを得るに至れることなり云々。

善光寺に就きて

富森大藥君

善光寺に就きては纏りたる史料なし。同寺の縁起の一般に信ぜらるれどもこは寛文年間に作られしものなり。最も古く見ゆるは扶桑略記申のものにして、後の縁起は皆これに基くが如し。それには本尊は百濟の聖明王より獻じたる佛像なりとの事を記せり。源平盛衰記等に至りて本田善光のこと見ゆ。即ち善光が佛像を持ち行きて麻績郷の私宅に安置し、皇極天皇の時佛告によりて水内郡に移すこととなり、又勅命によりて善光寺を建立せられたるなりとあり。後世になるほど種々の面白き附會説附加せられたり。この寺の信仰は平安朝末より鎌倉時代にかけて盛んにして鎌倉時代の末とされば善光寺如来と念佛とが結びつけられ、同時に又聖徳太子を奉合するに至れり。この寺の起原は甚だ疑はし。推古朝に信濃にまで佛教が廣まり居たりとも思はれず。又交通不便の地に持ち行きたること信じ難し。こゝに於て吉田博士は地名辭書に於て貞觀以前のものにあらずと述べられたれども、これも直ちに首肯するを得ず。予の考ふる所にては、善光寺如来が朝鮮よ

り來りしことは否み難く、而して善光と云ふ名は當時の歸化人に多くある名なれば、これも歸化人の一人にして、それが佛像を持ち來りて信濃に安置し、始めは私寺なりしものが漸次隆盛となれるものなるべし云々。

神佛習合と修驗道

清原 學士

神佛習合の原因は種々あるべし。或は僧侶が弘法の手段として作爲せるもあり、又一般國民の佛教理解の程度の如きも然り。されどもこの外に尙修驗道のことも考ふべきなり。故藤岡博士は國學史の中にてこれを説き、修驗道の高僧が山野開拓に當りて、前より祭られたる神と關係をつくる必要上神佛習合となりたりと云はれたり。予はこの外に修驗道の内容より考へてこれが神佛習合を助長せしことを進べん。修驗道は役行者を祖とし、その教理は眞言を基礎とすれども、外に支那の陰陽五行説、道家説、更に日本の神道の信仰を盛に交へたり。かくの如き宗教ありしことは神道と佛教とを習合するに都合よかりしならん。又他の一面即ち本地垂迹より觀るに、本地垂迹の最も早く完備せしは或特別の事情ありたる伊勢神宮及び石清水八幡宮を除きては修驗道に關係ある熊野及白山権現なり。又本地佛として選ばれたるは主として十三佛なり。この十三佛は全く日本に於て發生したるものにて、その起原

に就きては種々の説あれども、中古眞言僧が十三佛を誦び、十三佛曼荼羅を作りたるに始るこのことに一致せり。さればこの佛が本地佛となりしは修驗道が力あるにはあらざるか。要するに我日本神道の印度の佛敎との間に旗色不鮮明なる修驗道ありしことは、神佛習合を促す橋渡しになるならんと思はる云々。

例會 二月十八日、今回は三浦教授指導の下に葛野郡花園村妙心寺の史料を採訪すること、午前九時先づ同寺塔頭春光院に赴き住職川上孤田師の街道により、本寺及び子院を歴訪してその所藏にかゝる各種の史料を調査し、夜に入りしも時間不足の爲め豫定の調査を完了すること能はず、これを後日に譲りしは遺憾とす。唯當日川上師を始め本寺及び子院の諸師が吾人の調査に對して多大の便宜を與へられし好意は深く感謝する所なり。この日會する者三浦博士、西田講師、中村學士、神浦、松野、下川、牧、富森、古田、桑原、鈴木、丹羽、藤田の諸君なりき。今左に吾人の注意に上れる重要なものを列擧せん。

當寺及び子院の所藏にかゝる古文書は頗る多く、玉鳳院には花園天皇の宸翰を始めとして、後柏原天皇の文明十九年九州に募緣して本寺の再興を計らしめられし繪旨は本寺と九州との關係を徴すべし。靈雲院には後奈良天皇の圓満本光國師(大休)徽號の勅書あり。退藏院には同じく照天祖鑑國師(龜年)徽號の勅書あり、別に

大休、龜年の師弟の現存中兩人國師號の有無に就きて先例調査を命じ給ひし宸翰は皇室式微の際に於ても尙天皇の名分を正し給ふ御慮の程を偲び奉るを得べし。その他大心院の細川政元の書狀は足利義材が越前より入洛せんさせし時、山門衆徒の連署してこれを遮らんさせざるを賞せるものにして、明應八年のものとす。

玉鳳院の永祿二年十二月十二日の幕府の御教書は同年行はれたる徳政が祠堂金に及ばざることを規定せるものなり。蟬桃院の堀尾忠晴の亡母を悼める歌は情意兼ね疎れるものにしてその文藻を窺ふべし。隣化院には南化和尚の筆跡少からざるが、その中和尙の手澤にかゝる天澤錄及び自筆祥雲寺領水牒等あり。水牒は慶長元年のものにして、三百石の寺領ありしことを見るべし。春光院の虚癩の書狀及び龍華院の道忠の黄蘗外紀、天球院の答客問は並びに隱元禪師の事蹟に關する記録にして、その來朝以後の隠れたる消息を傳ふるものなり。

本寺及び子院には又多くの正確なる書像、木像を藏す。その中玉鳳院の花園天皇宸影等の外は大部分室町時代再興以後のものにかゝるも、當時武門の名士にしてその檀越たりし者頗る多かりしかば、それらの肖像は歴史上參考となるべきもの多し。就中大心院の細川政元書像、衡梅院の細川高國書像(天文十二年)等は從來未

だ世に出でしこなきものにして最も珍すべし。雜華院の福島正則の畫像は嶺南の讀あり。衣冠の座像にして眼光人を射、谷祿氏所藏の畫像に似ず。智勝院の稻葉一鐵畫像(天正十七年紹察議)同貞通畫像(慶長八年南化讀)、隣花院の山内一豊、肥坂安治畫像及び木像、一柳直末畫像、蟬桃院の伊達政宗夫妻畫像(靈居讀法橋有隣齋筆)、春光院の堀尾泰晴畫像及び吉晴金助父子畫像(春龍讀)及び木像、同忠氏畫像(慶長十四年宗承讀)等あり。又天球院の天球院殿(池田氏)、雜華院の韶陽院殿(織田氏)の畫像、春光院の堀尾氏、大法院の徳川氏、寛永二年畿南讀、桂春院の石川氏(元禄十六年文永讀)等の女流の肖像は何れもその服装等戰國時代以後の風俗を窺ふに得難き史料なり。僧侶の肖像としては、玉鳳院の虛堂の畫像(寶祐六年自讀)、大應、大燈(支徳二年自讀)二國師の畫像等(他に)も傳ふるものながら何れも正確なる好標本なり。その他隣花院の南化和尚の自讀畫像、衝梅院の雪江の畫像(文明十六年自讀)及び木像、聖澤院の英朝及び愚堂の木像等は亦皆その眞を傳ふるものと見て見るべし。殊に雪江和尚の如きは本寺の再興に與りて方ありし名僧にして、その眉目生けるが如き風爽たる風采は戰國傑僧の面影をあらはすに足るものなり。これらの畫像は多くは禪林の大徳の讀を有し、又狩野元信以下畫伯の妙技を揮へるもあり、それらは美術上の價値も少からざるものとす。

●支那學會

例會 二月廿二日午後六時より文科大學九教室に開催す、來會者狩野、桑原、内藤、高瀬諸教授、今西助教、富岡講師其他會員二十有餘名、左の講演ありて午後十時閉會せり。

一、詩經の句法と離騷の句法

財澤愛泉君

先び詩經及び離騷の句法と押韻とに就て語り、次に兩者を比較して(一)、離騷には意義の繰返しあるも文句の繰返しなし(二)、詩經は四言が主、離騷は六言なるもの多し(三)、詩經には助辭少けれども離騷には殊に多く、且つその特色は分りにあり、その用法も詩經に用ひたるものと異なる、これ楚地方特有のものに非るや云々

一、大監中齋の半面

高瀬教授

中齋の學說の出て來るところ、その萬物一體の思想、太虚に至る彼の學說、その天地合一説を説き、彼が最後の一事に就きて、動機善、方法悪、結果は必ずしも悪ならずと批判結論せられたり。

●西洋史讀書會

例會 二月二十八日(水)午後六時より學生集會場に於て開催左の紹介あり。

戰前及び戰後に於けるアメリカの政治地理 牧健二君

本論文はアメリカ大陸の事情に精通せるHenry H. Johnston氏のものせし所にして英國地學雜誌(一九一五年四月號)に載せられた

るものなり。歐洲戦亂ニアフリカ政治地理との關係に着眼し、同大陸に於ける獨領植民地及び他の歐洲列國の領土の變動に就て考察せるものなり。先づアフリカに於て獨逸人が、曠地の探險及び地理上の智識の闡明に盡力したる功績を述べて之を賞揚し、次に獨逸が一八八〇年の頃より植民地獲得を熱望し、ザンヂバル、カメルーン、モロッコ等各地に於てなしたる政治的活動の經過を略叙し大戰勃發前の獨逸のアフリカに於ける地畛を明にし「當時、英國は寧ろ獨逸勢力のアフリカに於ける發展を望み、若し、獨逸の陰謀による今次の戦亂なかりせば、英國は獨逸がアフリカの植民地に就き白、佛、葡等と條約を締結することあるも此れを承認したるべし、然らば獨逸は一九一六年には實に、二百萬平方哩の面積を有し七千五百萬の各種土人を網羅せる廣大なる海外植民地を獲得し得べかりしなり」と論ぜり。然れ共大戰の勃發により獨逸は有利なりし戦前の地位を失ひて戦後政治地理はアフリカ地圖を如何に形るべきかに就きて獨領アフリカ植民地と英佛白葡の關係を論じ、氏一箇の見解を披瀝し、又次にアフリカの豫想以上に天産に富めること之が開發は戦後の歐洲經濟界の重要問題たるべきことを言ひ、先づ風土病を根絶し、土人の酒精使用を嚴禁し、盛に鐵道を敷設し土人の言語を研究し、又博愛事業を盛んにし、尙ほ土人に政治上相當の自由及び權利を賦與するの必要あることを説述

せり。本論文は其性質上所説英國人以外の者に与りては間々問題たるべきものなるべしと雖、アフリカの事情に精通せる一英人のアフリカ政治地理觀として傾聽に値すべきものなり。尙本論文に關しては、昨年度外交時報所載箕作博士の「植民地整理に關する大戰前の英獨協商」を参照すべきなり云々。

●地理學研究會

例會 二月二日、地理學研究室に於て開く、會員勝山圭三君の「關東地方地形の研究」の講演あり、先づ關東なる語原より説き起し、山岳の地質地形及び火山系統各火山の山體構造等を詳説し、次で關東平野の地形及び其成立に就きて論じ、終りに關東地方の水系を述べ特に利根川に關しては河道の變遷の證左を指摘したり講演後各會員の質問あり、最後に小川教授は精細に之を批評し且つ此種の問題の研究法に就き注意と希望とを述べられたり。

例會 二月十六日、地理學研究室に於て開催、會員下田禮佐君の「朝鮮半島の地質及び地形」の講演あり、半島は中部なる所謂竹駕嶺地溝帯によりて南北に分たれ、之より以北は自然及び人文上の諸點概して滿洲的にして以南は寧ろ日本のそれに類するを指摘しかくて南朝鮮を重嶺、蘆嶺、太白山脈小白山脈等の諸嶺に分ち各地層の走向傾斜主峯及び地質構造等を細説し、所謂竹駕嶺地溝帯

なるものは半島を二分する拆裂線にして長さ二百軒、幅四軒内外最も廣き所も八軒を超はず、其上に支武岩が噴出して臺地狀をなし、處處水流に切り込まれ峡谷をなせること、此線は鐵原を通過し南々西より北北東に向ひ東北端は永興灣にして元山港の後地 (Greenland) は實に之に當ることを説き、次で北朝鮮は東亞細亞 Statehand の一部をなし、江南山脈、狄爾嶺山脈、妙香山脈等皆西南東北の方向に走り、就中此最後のものは威鏡道の方面に延びて、鴨綠江及び豆滿江上流と日本海に入る諸小流との分水嶺をなす、尙威鏡道東北部には威鏡山脈あり、その中部には支武岩の廣大なる高臺あり、蓋馬高原といふ、而して北朝鮮の南部は朝鮮との中間區をなし、多くの小山脈略東西に連なり其東部遂安、谷山附近に古生系を連きて噴出せる支武岩臺地あり。

水系は朝鮮にては分水嶺東に偏するを以て、日本海斜面には大河なく、唯黃海斜面に漢江、錦江、榮山江、朝鮮海峽斜面に洛東江等あるのみとて各に就き水誌を述べ、又北朝鮮の河川も多くは東北より西南に流れ、鴨綠江、清川江、大同江、禮原江は黃海に豆滿江は日本海に入る、尙東斜面には永興の龍興江、威興の滅川江、端川の南大川、北大川等の諸小川あり、概して西斜面の河川は其沿岸に小平野を作る、中にも黃州載寧間の棘城平野は本半島最大のものとす、而して日本海方面には平野と稱すべきものなく、僅かに

河口に小三角洲あるのみ。一般に半島は地形既に全く老衰し谷深く流緩かに湖水一も存せず瀑布も火山岩地方の外之を缺く云々。講演後例によりて各會員の質疑あり、小川教授は最近の旅行により視察せる所を基として各節の批評を試みられたり。

遠足 會員の大部は、三月十一日、銀閣寺口より如意嶽に登り、池の谷、五別所、千石岩を経て大津に出て、東山の一部の地質、地形を踏査し、湖畔の大學附屬湖賀驛所を參觀したり。同十八日には、愛宕山に登攀し、水尾、保津を経て龜岡に出て研究する所あり、更に同二十一日には、粟田口より東山々背を南走して山科に出て、附近の地質地貌を調査したり。

●滋賀縣蒲生郡誌編纂概況

近時縣史市史郡誌等の地方誌の編纂事業各地に行はれつゝ、あるが滋賀縣に於ても、已に大津市志、栗太郡誌、坂田郡誌の出版ありたるを始めとして、目下甲賀、神崎、愛智、犬上、淺井、滋賀の諸郡及長濱、八日市、日野の各町等にありては、それ／＼郡誌又は町誌の編纂に着手中なり。蒲生郡誌も亦その一なり。同郡誌の編纂は今上陸下御即位記念事業として大正三年より五箇年繼續の計畫を以つて始め、中川泉三その編纂主任たり。編纂期を二期に別ち、大正の三・四・五の三ヶ年間に史料採集に充て、六・七兩年を以て編纂期とす。郡内の史料に對しては各町村に一名又は二名の其町村の

委員を置き、編纂主任は二名の助手と共に、毎年數回、各町村に出張し、史料を採訪して遺漏なからん事を期し、郡外の史料に就ては隣接郡村は勿論、東西の兩帝國大學を始め古社舊寺を歴訪して其蒐集に力を致せり。郡誌は之を通志、土地志、氏族志、合戰志、神社寺院誌、農工商志、教育志、古跡名勝志、文筆志、人物志、雜志等の數編に分ち、各編更に小別さるゝ豫定にして現今は採集史料の整理を終へ將に稿を起さんとしつゝあり。而して過去に於ける事業としては、大正三年十月十八日より三日間、安土何淨殿院にて第一回史料展覽會を開き、更に同四年十月八日より三日間、日野町小學校に於て第二回史料展覽會を催し、文學博士喜田貞吉氏及び鷺尾順敬氏を聘して講演を請ひ其他郡内に存する小脇館觀音寺城、岡山城、日野城、安土城、八幡山城、長光寺城等の諸城砦を實測したる如き其著しきものなり。(中川泉三氏報)

●名古屋溫故會

名古屋に於ける若山善三郎、宮崎鉦一郎、石邨郵吾、鷺尾祖鳳等諸氏の發起に係り、史學の研究、知識の交換を目的とするものにして昨年四月愛知縣立第一中學校に其の發會式を舉げ服部第一、中學校教諭の「日本に於ける儒學の分派」と題する講演あり、六月十一日中島郡妙興寺に古文書、書畫を觀覽し十月八日市内南區熱田須賀町淺井又太郎氏所藏古文書及什器を觀覽、十一月十一日覺王

山日蓮寺に野田密藏院所藏十六羅漢の畫幅等を觀覽したり。(若山善三郎氏報)

●大谷大學史談會

大正四年より眞宗を中心とせる佛敎の史學的的研究を目的として起れるものにして、現に毎月一回開會しつゝあり。會員の多くは又本會の會員なり。講演の主なるものを舉ぐれば山田文昭氏の「上洛後の親鸞聖人」稻葉圓成師の「支那佛敎研究書目」庄田智見氏の「幸西の一念義に就いて」橋川正氏の「眞宗初期の門弟」右近純教氏の「敎信沙彌の研究」等なり。(已上大谷大學發行無盡短揭載)最近に於ける橋川正氏の「眞宗のたよに就いて」の講演にては、藤原賴長の「台記」石原止明の年々隨筆等の記事に照して「たよ」は忘屋にして、眞宗の多屋は寺院の旅宿即ち今日のお小屋(詰所)の起原なりと結べり。(會員太田力氏報)

會 報

大正六年二月三日午後一時半より文科大學第八教室に於て本會茶話會を開き會員理學博士小川琢治君の支那旅行談ありたり

大正六年三月十日午後一時半より文科大學第九教室にて例會を

聞き左の講演あり。

一肥後に於ける彫刻ある古墳に就いて

會員

梅原末治君

一支那に於ける近世火器の傳來に就いて

會員文學士

矢野仁一君

●正 誤

本誌第二卷第一號(大正六年一月發行) 第一七六頁上段十行目
(讀史會大會に於ける内田博士の講演摘要の中)「臺灣に産する麝
皮及び砂糖……」は「鹿皮」の誤に付き訂正す。

●寄贈交換書目

佛敎之美術及歴史

會員 小野支妙氏

滿鮮地理歴史研究報告第三

東京帝國大學文科大學

大和國金石文屏覽會陳列目錄

會員 佐藤小吉氏

國史叢書 日本偉人言行資料

國史研究會

道成寺古瓦繪葉書三十枚

會員 鹿島圓次郎氏

史學雜誌

歴史地理 國學院雜誌

地歴叢報 飛驒史壇

東洋哲學

東洋學報 徳島毎日新聞

●會費領收報告(振替貯金拂込のものに限る)

(大正六年三月五日迄に受領の分)

一金一圓二十錢(大正六年分)

楠 昌

田中萃一郎

宮本純四郎

河野 常吉

清水 博夫

河野 省三

米澤 元健

勝浦 柄雄

押上 森藏

浦上 宗衛

長南尊之助

齋藤 俊次

岸本 繁造

下村三四吉

上原精一郎

岡 茂政

秋山吉次郎

松野仁左衛門

龍 肅

芝 葛盛

野山 忠幹

一金二圓四十錢(大正五年十月一十七年七月)

一金三圓(大正四、五年分)

入 會

大阪府泉南郡高石町大字今在家

本山 彦一

東京府豊多摩郡落合村

近衛 文麿

奈良寺興福寺内

大屋 徳城

東京市本郷區駒込林町

今村 勝一

京都市外葛野郡花園村妙心寺塔頭春光院

川上 孤山

岐阜市外加納町東丸内

關 世男

(右紹介者 三浦周行)

朝鮮京城府龍山漢江通十一番地

(右紹介者 黒井治徳)

京都文科大學國語學研究室

東京府下葉鴨宮仲二四四一

奈良女子高等師範學校

東京市本郷區森川町一

大阪府三島郡吹田町

(右紹介者 西田直二郎)

東京市京橋區南小田原町四丁目五

(右紹介者 濱田耕作)

廣島市南竹屋町七

高知市南新町

東京市麴町區紀尾井町九

(右紹介者 今西龍)

東京市神田區駿河臺鈴木町十八

(右紹介者 原勝郎)

北海道札幌中學校

(右紹介者 植村清之助)

福岡市荒戸町四番町

大阪府立八尾中學校

熊本市新堀町

伊藤 春吉

友枝 照雄

武田 祐吉

西田 興四郎

中村 孝也

武内 義雄

澤村 專太郎

藤岡 繼平

寺石 正路

津田 左右吉

三浦 新七

中村 祐海

中山 平次郎

長南 倉之助

角田 政治

京都文科大學國史研究室

山口縣山口町下金古曾一〇

神奈川縣鎌倉亂橋材木坐蓮乘院内

東京市下谷區上根岸町八二

(右紹介者 梅原末祐)

丹羽 正義

木村 重治

小野 玄妙

近藤 磐雄